

別添資料

この別添資料の新聞記事については、旧漢字の現代漢字への変更、ルビや文字上の飾りの省略など引用者が原文に変更を加えているところがあります（文中の [] 内は引用者による注記）。

なお、資料内に含まれる差別的な表現については、歴史的用語として当時使用されていたまま表記していますが、これによって差別を助長させるものではありません。

資料 1：『東京日日新聞』 大正 15（1926）年 2 月 26 日、7 面

「武蔵野の真ん中へ不思議な停車場 国分寺立川両駅間に四月から 誰が乗るやら降りるやら 寄付で出来る新駅」

「鉄道省では年に平均五十位の新駅が建設線既設線を通じて建設されるが、その都度地元との間に寄付問題を惹起し苦しい結果を招来することすらある、それは鉄道では駅を設置する場合交通運輸の上から必要と認めなほ収支がつぐなふ処に設置する名目になつてゐるが事實は殆ど政界のブローカー連の運動によつて設置しなほ地元には必ず駅の敷地及び工費の一部を負担させるので従つて寄付の有無多少によつて駅は数町も右にも左にもなり工事着手の遅速等にも手加減があり惹いては停車場の奪ひ合ひや醜運動すら起つて来る、その実例ともいふべきは数百の停車場設置の請願が十数年前から出てゐるのに昨年願書が提出された中央線立川国分寺両駅の間にある箱根土地会社経営の分譲地への停車場設置の件は十月ごろに書類があま降りて出るや否や将来電車駅としての設備上設計を慎重にしようといふ東鉄運輸課の申し出で [ママ] をも聴かず無理矢理に赤紙付で至急に盲判をとり十二月から工事に着手してすでにこの三月廿八日には完成し四月一日には列車をとめて開業する計画になつてゐる、こんなに手取り早くラチの明いたことは全く未曾有のことであるがこれは全く敷地、建物ホーム、線路、土盛、広場等の工事材料一切価格十五万円を箱根土地会社から鉄道省に寄付した為である、鉄道省側のいひ分によると大正十六年末に商科大学が移転するから学生の通学の便のためといふのであるが同所は広ぼうたるくぬぎ林で国分寺駅から二マイルの間一軒の人家すら沿道には見ることも出来ない地点で何を急いで四月に駅を作るのであるかさっぱりわからず会社の人の外は猫の子も乗降するとは思はれず国有鉄道は一私設会社の提灯持をして地価を釣上げたときへいわれてゐる、実際一年前まで二円三円五円位の土地が停車場設置によつて分譲価格は急に廿五円から卅八円までになつてゐる、これで分譲すれば寄付の十五万円位一ヶ年で元をとりかへしそれから先は会社の儲けとなる」

「寄付のために苦しむ町村 鉄道省は孤児院かと 省内技師も大憤慨」

「従つて省内には反対するもの頗る多いが根本的に鉄道が寄付をさせることの害について非難するものは更に多い鉄道省運輸局某技師は語る『駅新設の場合鉄道では地元へ寄付を

させることは実に良くないことだ、だから駐車場の位置については公平な専門家が公衆の利福を考へて選んだ処よりも寄付を多くする処に設置される様になる従つて運輸交通の見地等は問題にならぬ結果を惹き起すのだからたまたま信越線高崎横川間の群馬八幡駅の如きも政友会の武藤金吉氏の運動で設置されることになつたがさて工事となると寄付をしなければ工事をしないと鉄道からいはれ内務省から補助をうけてゐる貧弱町村が三万円ばかりの土地を寄付するため町の財政の底をはたいても足りぬ等の問題を起こしてゐる、駅は出来たが寄付した土地の所有者は町から賠償ももらへぬと今なほ騒いでゐる話は有名である、国有鉄道ともあらうものが孤児院の様に寄付をもらはねば停車場が出来ないとは滑稽なことでその位なら何も造らないでも結構である、斯様なことがブローカーの跳梁する間隙となるのである 中央線の今度の駅の如き殆ど約二年後でなくては必要のないのに何のために早くしたのかわからない、私設会社の地価を釣上げるばかりであるといはれても弁解はない筈、同所は大正十七年度末にならなければ電車は通じないし坪二円位の処ときいてゐる、省内でも同駅が谷保村谷保といふところにあり反対のほやといふ駅がすでにあるので名前に困つてゐるまさか箱根土地停車場と命名も出来ないのだね』」

「客がなければ汽車は停めない 寄付はやめる方針 青木鉄道次官曰く」

「これにつき青木鉄道次官は語る『あそこは商科大学が出来るといふので駅を設置したらいいだらうと局長会議できめたと覚えてゐる丁度駅の新設地がセツツルメントの中央にあるので格別に寄付させたことと思ふ、然し今まで駅を設置する場合常に鉄道では寄付をさせて来たがとうもよくないことが多い、仙石鉄相も今は絶対に寄付を受けず営業上の収入の程度で定める様に最近会議を開いて停車場設置規定を作ることになつてゐる位である、今度の中央線のその駅については早速運輸局から人をやつてよく取調べをさせ駅が出来ても営業の収支がつぐなはなかつたり或は人があまり乗らぬ様なら汽車は止めぬ様にしよう、兎に角調査する』と」

「金の光は七光り 大得意の箱根土地社員」

「新停車場建築地を訪ふと現場監督の箱根土地の社員は得意になつて滔々としやべる『こゝは百万坪ありまして（鉄道の調べでは卅万坪余といはれてゐる）この秋には電車も運転する様になります（実は大正十七年末である）この駅の建物は私の会社がこの線路からこの土を高くして、土盛や砂利駅前の道まで四十万円をかけて造つたので皆会社の物です、鉄道にすつかり寄付するのですが（鉄道は十五万円といふ）鉄道はそのため貨物列車をわざわざ止めてくれます。清水組に受負はしてこの三月廿八日出来上がり四月からは汽車がとまります鉄道は寄付しなければ何時までたつてもやつてくれません、金の光は七光りでしてね、この工事なぞは約五ヶ月もかゝりませんよ』とうそぶいた」

資料 2 : 『一橋新聞』 大正 15 (1926) 年 3 月 15 日、2 面

「建設中の国立町」

「国分寺駅から箱根土地会社に依つて仕立てられた自動車は未来の東京商科大学や国立大学町をほうふつとこの土台石の上に転開〔ママ〕しつゝ飛ぶ。同乗者は六七人皆ふところの太つた人々らしい。こうやつて毎日この種の国立理想郷創設者が三台もの自動車を休ませずに駆つておとづれると。幾本かの東京商科大学建設地なる木標が放射線形の区画上に突出てゐるのが目立つ

相そよく箱根土地の社員が答へる建築する商店住宅はことごとく文化式な本建築にすることを条件として分譲するとか、全く寄付になる国立駅が昼夜兼行で工事を急ぎ四月一日から汽車がとまるとか飲料水がよいとか、下水はどうするとか、電話はどうの日用品市場がどうの中女学校はこうのともう全くたなごころの中のものであるかの様だ。尚付加へて清水組の手で現今九百人の人が働いてゐるが商大のグラウンドの方の工事を主にやつてゐると。出張所の後方の新設駅工事が目のまはるやうな多忙だ」

資料 4 : 『東京日日新聞』 府下版 大正 15 (1926) 年 4 月 2 日、6 面

「きのふ 国立駅開業」

「一日開駅した国立駅では午前十時半〔ママ〕から立川町高橋諏訪神社々掌祭主となつて駅前広場で型の如く式典を挙げ清祓式来賓の祝辞等あつて同十時半ごろ式を閉ぢた余興場には餅まき、新宿園白鳥座童話劇軍楽隊、宝探し等数種の催し物に都人士に顧みられなかつた雑木林も盛況を極めたが同駅に停車する各列車時刻は次の如くである

上り	下り
午前 時 分	時 分
六、二九	六、一五
七、四五	七、五九
九、三〇	九、一四
一〇、四三	一一、〇一
午後	
一二、〇七	一二、二二
一、一九	一、三四
二、三一	三、〇二
三、四二	四、二六
五、〇七	五、三七
六、三〇	六、四二
八、〇九	八、二六
九、五五	一〇、一四